



2024年3月7日

三島信用金庫

『まち・ひと・しごと新聞（第8号）』発行のお知らせ

三島信用金庫（理事長 高嶋 正芳 以下「当金庫」）は、2024年3月1日に『まち・ひと・しごと新聞（第8号）』を発行しました。

記

1. 「まち・ひと・しごと新聞」とは

地域人口の減少や中小企業の採用難など地域課題の解決に資することを目的に、平成28年度より開始した取り組みです。当金庫と静岡県東部地域局が連携し、地元高校新聞部に対して県東部・伊豆地域の企業等への取材および新聞作成を委託しています。発行した新聞は参画高校の生徒への配布に加え、三島信用金庫の店頭、自治体の窓口等を通じて幅広く配布・広報しています。

2. 第8号の特色

今回第8号は「本業以外の取り組みを通じて、地域に貢献している企業・個人」をテーマに、さまざまな視点から地域活性化に取り組んでいる団体・個人を取材しました。

3. 参画高校（県東部4高校：紙面のページ順に記載）

県立韮山高等学校 写真報道探究部・日本大学三島高等学校 新聞部
県立熱海高等学校 報道部・県立沼津東高等学校 新聞部

4. 取材先企業（県東部を拠点とする4先：紙面のページ順に記載）

浅田ファーム 浅田様（伊豆市）・三丸機械工業株式会社（三島市）
熱海市役所 山田様（熱海市）・REFS 小松様（沼津市）

5. 発行部数

13,000部

6. 配架先

【三島信用金庫】

参画高校及び取材協力先企業・団体、各店舗及び同友会会員及びチャレンジクラブ会員

【静岡県東部地域局】

東部総合庁舎や管内市町の図書館・県東部地域の中高生
東部地域局と就職支援協定を結ぶ県内外の大学

以上

【本件に関するお問い合わせ】
元気創造部 地域未来創造課
TEL：055-973-5730



まじごとしごと新聞

第8号

発行

三島信用金庫

駿東郡長泉町下土狩96-3

055-973-5730

制作

県立葦山高等学校写真報道探究部

日本大学三島高等学校新聞部

県立熱海高等学校報道部

県立沼津東高等学校新聞部

協力

静岡県東部地域局



『100年後を見据えた町づくり』

今回、葦山高校写真報道探究部は、浅田ファームを経営し、自然農法に取り組んでいる浅田藤二さんに取材を行った。農家になるまでの道のりや、自然農法、地域活性化について話を聞いた。

地元愛が地域を支える

浅田ファームを

経営している浅田藤二さんは、46歳の時、地方公務員から専業農家に転身した。現在、自然農法による農業で伊豆地域の未来

を支える活動を行っている。

「荒廃農地や空き家が増え、衰退していく地域を目的の当たりにし、危機感を抱きました。この責任を自分が

取り、何か行動を起こさなければ間に合わないと思ひ、飛び出しました」最初は何を企画しても、「どうせだめだ」「無理だ」と言う人た

ちもいたという。「できない理由より、まずはやってみることが大切です。自分から動いて、実行しなければ何も始まりません」と力強く語る浅田さん。上手くいかないこともあつたが、次の成功のデータ取りだと自分

に言い聞かせ、様々なことに

自然農法を行うには、土が重要です。土の好気性菌が耕され、ふかふかで根が伸びやすい土ができます。そのために必要なのは、発酵させることです。草や米ぬかなど土、空気を混ぜて発酵を促します。すると土の日和見菌が好気性菌と同様に活動し、良い土ができるのです。農薬や肥料は使いません。特に窒素分の多い肥料の多投は、野菜を

苦くましく

自然農法では、自然を

先生にします。仮説を立てて試みます。すると、何年か経って自然が答えを返してくる。やり始めた頃は大変でしたが、何度も試して良い土ができました。手間暇かけて育てた米や野菜がよくできたときは、涙を流すほど嬉しかった。今では、他県の農家の方々が視察に来るようになりました。



自然農法への思いを語る

自然を先生に

先生にします。仮説を立てて試みます。すると、何年か経って自然が答えを返してくる。やり始めた頃は大変でしたが、何度も試して良い土ができました。手間暇かけて育てた米や野菜がよくできたときは、涙を流すほど嬉しかった。今では、他県の農家の方々が視察に来るようになりました。

先生にします。仮説を立てて試みます。すると、何年か経って自然が答えを返してくる。やり始めた頃は大変でしたが、何度も試して良い土ができました。手間暇かけて育てた米や野菜がよくできたときは、涙を流すほど嬉しかった。今では、他県の農家の方々が視察に来るようになりました。



浅田ファームの夕景



熱く思いを語る浅田さん

浅田さんは、誰もが「ここで暮らすと楽しいよ」と言える地域にするために、様々な活動に取り組んでいる。例えば、自然農法によって栽培された野菜や米をブランド化することで、中山間地域特有の小さな田畑に付加価値を与えようとしている。



▲笑顔で質問に答える

5年前には、伊豆半島を「A級ブルメ半島」にすることを目指し、「天城を食す」というイベントを開催。天城の食材を活用した料理を提供した。さらには、地域の雇用を生み出し、やりがいをもって働くことができる場所を作るために会社を設立したり、伊豆総合高校とコラボして

地域活性化のためのプロジェクトを進めたりしている。このような活動で交流人口を増やすことで、持続可能な地域を作ろうとしている。これからの地域活性化に向けて浅田さんは「若い人たちの力が伊豆半島に必要です。生まれ育ったこの地域を豊かに、元気にしてほしいです」と熱く語った。

編集後記

取材を通し、浅田さんの地元愛や、自然農法に懸ける思い、自ら行動することの大切さを感じる事ができました。

今回、取材に協力してくださった方々に、この場を借りてお礼申し上げます。未熟な点も多いですが、楽しんでいただければ幸いです。

【一面担当】

県立葦山高校
写真報道探究部

三島と世界をつなぐ

三丸機械工業株式会社

普段私たちが飲む牛乳やジュースにはホモジナイザーという機械が使われている。三丸機械工業では、さまざまなホモジナイザーを開発し、社会で貢献している。仕事内容やSDGsへの取り組みについて代表取締役の鈴木隆さんに話を伺った。

お客様を第一に

大正7年に設立、創業100年を越えた三丸機械工業株式会社、代表取締役の鈴木隆さんに話を聞いた。



鈴木さんと記念撮影



自身の目標を語る鈴木さん

鈴木さんに尋ねると「ホモジナイザーとは液体中の粒子に高圧力を加えることで、小さく均一にする装置だ。それにより食品であれば舌触りをなめらかに加工することができ、牛乳・ヨーグルトなどの乳化製品、ケチャップ・ドレッシング・ソースはもちろん、清涼飲料水にも使用されている。もちろん若者が好きなソフトクリームでも使われている。多くの食品は、なめらかでどろける方がおいしいよね。ホモジナイザーが欠かせ

細かい要求に応えてくれる」と話してくれた。そして「売った後のお付き合いも大切にしている。定期的なメンテナンスも実施しているが、クライアントの生産ラインを守ることも大切な仕事であり、故障があれば現場へ行って迅速に現地に行き修理を行う。お客様様の笑顔を見てやっていると、心がなぐさむ（なぐさむ）と思える」と笑顔で話してくれた。

三島っていいよね！

これからの時代を生き抜くために必要なことについて尋ねると「地域に必要な企業を思われること。私たち中小企業は地域と離れることはできないから、三島市にあるウイスキー

水力発電コンテストのポスター。内容は「水力発電の仕組みを学びながら、小さな水力発電所をつくってみたい」というテーマで、8月11日（日）に開催される。対象は小学生から中学生まで。賞品として、発電機、センサー、ケーブルなどが用意されている。応募方法は、ポスターを制作し、三島市役所に提出すること。

工場場の設計を手がけるなど、長年培ったノウハウを、展示された工場設計などに設計をさらに「進化」するAIやロボットとどのような向き合っていくかも課題であるが、働きやすい環境の提供や社員に愛社精神を持ってもらえるかが重要。そのため人間性を重視した採用を行っている」と



地域の未来を話し合う様子

も事業展開している。さらに「進化」するAIやロボットとどのような向き合っていくかも課題であるが、働きやすい環境の提供や社員に愛社精神を持ってもらえるかが重要。そのため人間性を重視した採用を行っている」と

理想の品質を追究する



鈴木さんイチ押しホモジナイザー

ホモジナイザーという聞きなれない機械について

鈴木さんに尋ねると「ホモジナイザーとは液体中の粒子に高圧力を加えることで、小さく均一にする装置だ。それにより食品であれば舌触りをなめらかに加工することができ、牛乳・ヨーグルトなどの乳化製品、ケチャップ・ドレッシング・ソースはもちろん、清涼飲料水にも使用されている。もちろん若者が好きなソフトクリームでも使われている。多くの食品は、なめらかでどろける方がおいしいよね。ホモジナイザーが欠かせ

広がる活躍の場

さらに最近では、医薬品や化粧品などだけでなく、半導体やカーボンナノチューブにも使用されている。そのため商品は日本だけでなく、アメリカ・イギリスをはじめ東南アジア諸国にも納品している」と、最初は乳製品から始まった会社であるが、時代のニーズに合わせて事業を展開していると語った。

次の100年へ

最近では事業展開にあわせて「新規工場の



三島初のウイスキー蒸留所

設計・建設」、「働きやすい環境の提供や社員に愛社精神を持ってもらえるかが重要。そのため人間性を重視した採用を行っている」と

編集後記

日大三島高等学校 新聞部です。

今回、三丸機械工業株式会社、代表取締役の鈴木隆様に取材しました。その中で、モノづくりへの情熱や諦めないことの大切さを学びました。また、一度県外へ出た人もこの企業を知ることに、再び地元へ戻るきっかけになれば幸いです。

最後にありますが、このような貴重な機会を提供してくださった三島信用金庫様、静岡県東部地域局様、本当にありがとうございました。

二面担当
日本大学三島高等学校 新聞部

と今後の方針について語ってくれた。また、三島を知ってもらいたい。NPO法人地域活性化スクラムに参加し、「三島せ



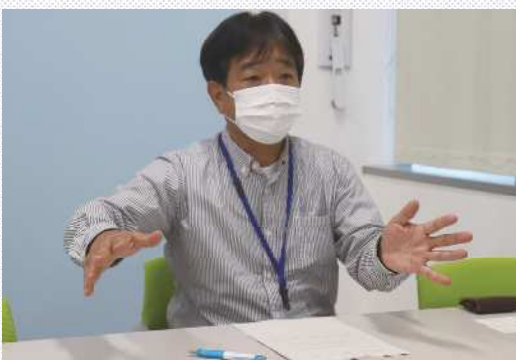
青い海と空が広がる熱海サンビーチの様子

予算ゼロ円・担当者ひとりの独自施策!! 他にはマネできない 「熱海だから」のブランドを

熱海市役所 観光経済課ロケ支援担当 **山田 久貴**さん

観光地は、「遊びに来る場所」という特性上、情勢の影響を大きく受ける。最近ではコロナウイルス感染症流行が観光地に大きな影響を与えた。パブル開墾、群発地震などで大きな打撃を受け、寂れた温泉街の代名詞だった熱海がいかにかしてV字回復をしたか、その鍵を握る熱海市役所の山田久貴さんにお話を伺った。

熱海復活の立役者 山田 久貴さんの来歴と想い



インタビューを受ける山田さんの様子

山田さんは、1966年に新幹線開通などで盛り上がっていた熱海で生まれた。高校卒業後は、総合レジャー企業、建設会社等様々な民間企業で従事した後、2001年に、35歳で熱海市役所の民間企業職務経験者採用枠で採用され入庁した。入庁後は観光課、企画調整課、教育委員会等の部署での勤務を経

て、2012年に観光課に戻り自らの発案で、テレビ番組等のロケを誘致・支援する新規事業「ADさん、いらっしゃい！」を企画、同年6月にたった一人の担当として事業をスタートさせ、2023年度現在で12年目を迎えた。山田さんは今後、政治の世界に入ったか、別の仕事に就くなどのいわゆる「天下り」のようなことはしないと明言している。その理由について「自分の仕事は、熱海のブランドイメージを上げること。結果は達成できたので、後は地元の人たちが作っていくこと。政治というのは全ての人に公平にはできない、満足させることが出来ないからやらない。」と語っている。高校生に対して一言を求めたところ「自分の特性・個性に基づいて仕事に就いてほしい。給料がいいとか、人に言われたことではなく、自分の個性を生かせる仕事にゆくゆくは就いて欲しい。」と述べた。



山田さんが勤務する熱海市役所第1庁舎

段買うような商品も選ぶ理由の中に「ブランドイメージ」というのはあるだろう。観光地も例外ではなく、箱根などの観光地は

熱海に必要だったものは、十五年程前の熱海は、夏休みなどの行楽シーズン以外に今ほどの賑わいはなく、平日は、

今でこそある程度の人がいる銀座通りや駅前前の商店は閑散としていた。火大会などのイベントはあったが、それでも駄目だった。山田さんは、そのような状況の熱海に足りないものを「ブランドイメージ」だと考えた。我々が普段買



熱海海上花火大会の様子

ブランドイメージが強い。しかし、当時の熱海のイメージ「お酒を飲んで騒ぐ場所」だった。他の観光地と戦えることである。しかし、観光地がテレビで取り上げられる番組は、一般的には旅番組等での観光名所やグルメ系の特集であるため、強豪が多く到底太刀打ちできない。そこで山田さんは、強豪が殆どいない「ニッチ市場」のバラエティ方面で取り上げられることを目指した。バラエティ系の企画の中には下品なものもある。一般的にはイメージが損なわれる可能性があるから嫌がられるものであるが、熱海はそれを率先して行った。また、バラエティというものは若い層が多く見る。競争のない世

成功への道

ブランドイメージを上げる為には「タッチポイント」が重要であるという。今回の場合では、テレビ等で熱海の情報を触れる機会を増やし、視聴者に熱海に対する興味を持ってもらうようにすることである。しかし、観光地がテレビで取り上げられる番組は、一般的には旅番組等での観光名所やグルメ系の特集であるため、強豪が多く到底太刀打ちできない。そこで山田さんは、強豪が殆どいない「ニッチ市場」のバラエティ方面で取り上げられることを目指した。バラエティ系の企画の中には下品なものもある。一般的にはイメージが損なわれる可能性があるから嫌がられるものであるが、熱海はそれを率先して行った。また、バラエティというものは若い層が多く見る。競争のない世



人でにぎわう熱海駅前の仲見世商店街

界で市場を独占し、さらに若い層に熱海を伝えられるというのには、まさに一石二鳥である。山田さんはバラエティ番組を呼び込む為2012年に「ADさん、いらっしゃい！」という企画を開始した。これはテレビ番組等のロケを誘致したり支援を行う文字通り「熱海のADさん」であり、この取り組みによって「困った熱海」「バラエティの聖地熱海」といった風に業界内で広まり、熱海でこの企画を取り上げた番組が年間



山田さん(中央)と本校報道部長

百本近いペースで放送された。企画開始直後は三十位ほどだった熱海の魅力度ランキングは、最高で十一位まで上昇、二〇二三年現在では十三位となり箱根を大きく上回っている。

編集後記

今回の取材で熱海市役所の山田久貴さんにインタビューをさせてもらいました。この新聞は去年も作成したのと同じく、インタビューのときにあまり緊張せずできました。山田さんは、「ADさん、いらっしゃい！」の企画の支援をしており、また、たった一人の担当として事業を始めており業界内での信望が厚いそうです。インタビュー時とても優しく話を聞いてくれて楽しかったです。山田さんが熱海をどれだけ大切にしているかがよく伝わりました。この新聞作成に参加できるのは今年で最後の方に見てもらえる嬉しいです。

三面担当
静岡県立熱海高校
報道部



▲小松浩二さん

また、「地域の良さを地元の人だけでなく、県外の方にも伝えていきたいです」と強い思いを述べた。

株式会社「REFS」の店主として活動し、一般社団法人「lanescape」の代表理事を務めている小松浩二さん。今回は、地域を活性化するための取り組みや活動を開いた。農薬不使用で始した経緯、これからの目標などについて話を伺った。

無農薬野菜の美味しさの秘訣とは

開店の理由や取り組みについて小松さんは「生産者の笑顔や野菜の美味しさの背景を知ったうえで野菜を美味しく食べてほしい。クリアルフードストリー、REFSを開店しました。八百屋の立場で地域の有機的関係を築きたいと思っています。野菜の販売以外に余った野菜の加工など消費の出口を作っています」と話した。

沼津を活気的な街へ

REFS・lanescape小松浩二さん



▲狩野川河川敷に机と椅子が設置された

みんなが楽しめる沼津に

公共の場を美しく

小松さんは、行政と協業して沼津市内各所で様々な取り組みを行って



▲整備が進む沼津市中央公園

設置などがされている。空間を綺麗に使うという思いから、木製の椅子にこだわっているという。実際に昼間公園を訪れてみると、家族連れや芝生のセンター広場の利用、卓球台や机、木の椅子の

一杯のスープをつくる時間



▲畑仕事を体験する



▲完成した器

REFSがこれまでに実施してきたイベントの中に「一杯のスープをつくる時間」がある。このイベントは、スープを飲む器を作るために木を切る過程から始まり、器が出来上がるまでの約半年間、スープの具材となる野菜の生産者の方の手伝いをするというものだ。

このイベントについて小松さんは「最初は川の始まりを見るために山へ行き、その後講師さんと狩りを行ったり、海に行き塩を作ったりしました。時間はかかりませんが、参加者の方に時間をかけて作ったものは美味しいということを知ってもらうきっかけになりました。イベントを通じてお母ののこをさっている方もいます」と話した。



▲卓球台が設置された

様々な体験をしてほしい

最後に小松さんに今後どのような活動を行ってほしいか、高校生に向けて伝えたいことを伺った。小松さんは「今年の八月に沼津で始めた取り組みである『まちのセントラルキッチン』をさらに稼働

編集後記

今回の取材を通じて、小松さんのまじりや活動するうえで感じる沼津の課題、現在沼津で行われていることなどについて知ることで、沼津により興味を持ちました。このような貴重な機会を提供してくださった皆様に感謝いたします。

「担当」
沼津東高校新聞部